

一隅を護り

千里を照らす

ビッグプロジェクトを通じてパラダイム転換を

(「ベンチャー・リンク六月号」掲載)

アジアの片隅の日本

「近い将来、アジアの片隅に日本という国があった、という時代がくる」。ある国際的に有名な政治家の言葉である。

「応任の乱と明治維新が同時に起きるような乱世に突入した」という論者もいる。

私も、長い間、同じような危惧を抱いてきた。

私たちが直面している状況は、まさしく日本民族存亡の危機といっても過言ではない。一過性の不景気などという認識で彌縫策を弄し、根本的な構造改革を怠れば、依頼心の強い無気力人間と我欲の塊のような人間ばかりが棲む「鬼が島」と化す危険性がある。

経済のみならず、政治、社会、教育など様々な局面で今、一気に噴き出している諸問題の解決策は、従来の思

考や認識の枠組の延長線上にはもはや存在しない。

私は、現在の閉塞状況は、パラダイム転換のためのビッグプロジェクトによってしか打破できないと考える。

そのためには、すべてのことがらを原点に帰って考え直す必要がある。その上で、人類共通の価値観に基づいたビジョンを提示しなければならない。

中国の諺に、「繁栄の極みに衰退の芽は生じ、衰退の極みに繁栄の芽は生じる」という言葉があるが、私は現在の危機は、将来の繁栄の礎を築くための、またとないチャンスとして生かせると考えている。

今こそ、たんなる景気対策の次元にとどまらない、人間復活を目的とした、歴史の評価に耐える行動を起こすときにきている。

好景気の定義

「景気がいい」というのは、どういう状況を指すのだろうか。

物がよく売れ、企業が儲かり、回り回って庶民の懐や国庫を潤す。これが、表面的な解釈である。

だが、私は「個人が楽しく愉快に生きている状況」と定義している。

果てしない人間の欲望を活用し、理想社会ができあがる方向に導く。各個人が、その目的達成のため、自分の役割を自覚、それを強制されずに果たして、楽しく愉快に活動している。そういう状況を「景気がいい」というのである。

次に、「企業とは何か」。

企業の「企」という字は「人」を「止める」と書く。

止まる人とは、顧客のことである。企業は顧客、すなわち消費者なしには存在できない。

ところが、人は本来立ち止まることを嫌う。そういう人間を止めておくためには、立ち止まるほどの価値のある何かをたえず創り出さなければならない。そういう創造行為が企業活動である。

だから、人間の欲望に歯止めがないように、企業活動も企てに次ぐ企てで進んできた。そのこと自体は非難されるべきことではないが、そこに利己主義と競争のための競争が加わったため、だんだん社会や人間性に歪みが生じるようになり、人類の存立基盤を脅かす環境汚染も深刻になってきた。

そういう問題を是正するのが事業家の役割である。私は、「事業家とは経済活動を通じて社会変革をめざす者」と定義している。

いくら崇高な目的を掲げても、事は始まらない。その目的を具現化するための目標のイメージを絵や数字に置き換える。そして、それに賛同する人たちが集まり、役割分担、計画を立て、組織をつくり、人々の欲望がより高次元になるような制度をつくる。さらに、富の再配分におけるプロセスの中で、心の進化が促され、意識改革が無意識のうちに行われて、未来を担う志を持った思考力豊かな人物が育っていく。これが、事業である。

今、自然環境と調和がとれ、節度と思いやりが生まれる持続可能な共生社会へ向けて、新たな事業が求められている。その事業のプロセスを通じて、競争と共生が矛盾なく両立する道筋が生まれてくる。

「守成」の時代

21 世紀に共生を許される人間の条件は「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」を目指し、それぞれの置かれた立場に立って具現化すべく目標を定め、役割を担うこと、と考える。

500 万年前に誕生したといわれる人類が、火や道具を使い、農業を営み、産業革命を経て、今日の工業化・情報化社会を築き上げてきた歩みは、この究極の目的を追求する過程ととらえることができる。

「飢餓と殺戮の社会」から「天寿が全うできる社会」への移行期を「創業」の時代、そこから次の「楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会」へと歩みを始めた段階を「守成」の時代と定義している。

未開地や発展途上国では、飢えや殺戮の問題は未だ解

決されていないが、先進国では、科学技術の急速な進歩によって生命を脅かされる心配は少なくなっている。

つまり地球は、創業から守成への転換期と位置づけられる。東西冷戦が終わり、人類は初めて、名実ともにそのような段階を迎えた。

では、どのような転換が必要なのか。

創業の時代には、「霸道」、すなわち武力や権謀術数で国が治められる。そしてこの時代は政治家・官僚が主導。

対して、守成の時代は「王道」。この時代は、事業活動を通して修羅場を経験した、社会心理学者アブラハム・マズローのいう自己超越実現欲求の段階に達した民間が主導。

「飢餓と殺戮の社会」から効率的に脱する手段として、霸道は確立されたものである。

派生する犠牲を承知の上で、ホンネとタテマエがある

ことを常識とする文化を創る。また、人心が物欲・権力欲を肥大化させるよう諸制度を作ることにより、新しい技術に興味を持つ人が増え、その技術により物が作られ、さらにその物が新しい技術を生む。とくに戦いの中では、これが急速に循環。平和時には、この成果は、衣食住を満たし得る社会を作る上で大きな役割を担ってきたのである。

とはいえ、このような理論や手法は、一時的なものしかありえない。それを平和な時代においても、永遠のものであるかのごとく大衆を欺くことで、霸道は成立していた。

霸道から王道への転換

一方、王道は永続可能な本音の理論・手法である。

大事なことは、状況が変わったら、理論・手法を根本的に転換することである。さもないと、副作用により人心・肉体の崩壊を通じて社会が滅亡する。と同時に、周辺諸国に多大な損害を及ぼす。

戦後の日本は、大量生産・大量消費の物質万能主義で突っ走り、経済大国となった。しかし、規格製品を効率的に生産することは、戦時経済の優先課題である。それがそっくり戦後に持ち込まれたことは、戦争中にだけ通用する一時的な理論・手法を、永続可能なもののように、大衆に錯覚させ続けてきたということである。

私は、日本において、霸道から王道への転換点は、1985年、ドル高修正のため為替市場への協調介入が決まった「プラザ合意」だったとみなしている。しかし、当時も構造改革が叫ばれながら実現せず、そのままバブルに突入し、現在の惨状を招いてしまった。だが、今からでも

遅くはない。ただし、残された時間は少ない。

大量生産・大量消費の 20 世紀には「物づくりとその普及のための人づくり」(霸道)が追求された。これを、21 世紀には「楽しく愉快に持続的に生きられる人づくりのための事おこしと物づくり」(王道)へと転換しなければならない。「事おこし、物づくり」の過程の中に感動を甦らせ、人間の心の進化を促す施策、すなわち人類共通の目的に向かった競争と共生が矛盾なく両立する仕組と場の設定。これが、必要とされる「パラダイム転換」のプロジェクトである。

「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」

「楽しく愉快に持続的に生きられる人づくりのための

事おこし」をめざす具体的事業の場を創出するべく、私は、『東海総研マネジメント』1995年12月号で、初めて発表させていただいた、一期工事5000億円、総事業費2兆円規模の「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業」に向かって、一步を踏み出そうとしている。

すでに、その構想に基づき、4つの具体的なプロジェクトの計画を、出雲において発進させている。

そのひとつが「ゼロエミッション・小規模理想郷」プロジェクトで、次のような内容である。

島根県が干陸を予定している中海・本庄工区を水面で残し、ドリームマリンランドとし、環境、食糧、エネルギーなど、人類が直面する危機をいかにして乗り切るかを模索する実験場とする。

バイオテクノロジーと光ファイバーで導いた太陽光により、湖底に堆積しているヘドロからエネルギー触媒

水を作り、藻類を繁殖させ、「爆発的な生命連鎖」の起
きる汽水湖として蘇らせる。

さらに、周辺にエネルギー触媒水による無農薬・無肥
料田園都市を建設。ここでは、太陽・風力・水素などの
クリーンエネルギーを用い、少ない水源で農業を行い、
文化的な生活を送るための技術開発を進める。

これにより 21 世紀の新しい文化の創造をはかり、議
論・研究・構想・調査・企画・設計・建設・運営のプロ
セスを通じて、心の進化を促し、21 世紀の世界を担う
人物育成をめざすものである。

志を同じくする個人、良識ある企業・団体が自発的な
意思によって寄付、投資を行い、このビッグプロジェク
トを推進。

つまり、従来の公共事業のような手法はとらず、新し
い官民の役割を定め、計画を進める。

財政破綻の時代に、公共事業には依存できない。国債の発行は、どう言いつくろってみても、今の若い人たちに借金を残し、活動の自由を束縛する以外の何ものでもない。さらに、北東アジアの不安定要因と重なり、このままでは早晩、日本国内において地獄絵が繰り広げられる可能性も否定できない。

高齢・少子化が大きな社会問題になっている時、世代間の分離・断絶はますます深まり、最後には応仁の乱のような世代間闘争にいきつく。現在、社会で最も大きな問題となっている子供たちの残酷な事件は、このことを暗示しているのでは。

このプロジェクトは、世代・地域間の「富の移転」を促し、国内外の諸問題を解決する糸口になると同時に、難問山積みの世界情勢に新たな道筋を提案できるものと確信する。

戦後、復興期から高度成長時代を経て今日に至るまで、必死に働いた日本人の富が、1200兆円の個人金融資産として蓄積され、そのうち高額資産者約50万人で、全金額の7割を占めるともいわれている。

金融ビッグバンにより、世界のために、この資産を国外へ流動させる必要もあるが、一部は「楽しく愉快地に持続的に生きられる地球社会実現」のために海洋立国・技術立国としての、日本の役割を果たすべく、この実験プロジェクトを立ち上げ、投資することが、今、必要と確信する。

アメリカをはじめ世界各国からの内需拡大要求にも応えられ、さらには、世界に誇る土木建築技術を持ちながら苦況にあえぐゼネコン業界にも朗報をもたらす。

このビッグプロジェクトは、21世紀に向けたパラダイム転換の起爆剤。これがきっかけとなり、世界各地で

連鎖的な知的爆発が起こり、人類未踏のユートピア建設に向けて、多くの人々が立ち上がる。

出雲の地で生まれたこのプロジェクト（案）が、志ある人々の心に火をつけ、議論が始まり、閉塞状況が打ち破られる原動力になると確信するものである。